反自然主義

――個体の意味（あるいは生きることの意味）について――

岡　部　　勉

はじめに

私たちの物理的・身体的条件についての話は、それがどのレヴェルの（どのレヴェルに属する）物理的・身体的条件の話であっても、すべて私たちの「自然」についての話であると、恐らくは何らかの仕方で言うことができるであろう。以下で「自然」というのは、「物資」レヴェルの話であれ「能力」レヴェルの話であれ（例えば私たちは走ることはできるが飛ぶことはできないというような話が「能力」レヴェルの話である）、とにかく私たちのあらゆる生命活動の物理的・身体的条件のことを言うものとする。そして私たちの生命活動（私たちの活動・行動・行為）についての話はすべて、結局はこの意味での（どのレヴェルかの）「自然」についての話に帰着する、あるいは最後はこの意味での（どのレヴェルかの）「自然」についての話になる、と主張するあらゆる種類の主張を、私たちの生（生命活動）についての「自然主義」の主張と呼ぶことにする。

私が以下ではっきりさせたいと思っているのは、このような意味での「自然主義」は私たちがそもそも何であるのか（そして私たちがしていることは何であるのか、私たちがしていることにはどういう意味があるのか）を最終的に明らかにするものではないということである。

ところで、アリストテレスは（上に言ったような意味での）自然主義者だと私は思うが、その自然主義は（素朴な物理主義者のそれのような）単純なものではない。はっきりしているのは、アリストテレスはどんな意味でも（すべては物質レヴェルの話になると考えるような）還元主義者ではない、ということ

だけであるかも知れない。それにアリストテレスの自然主義は単純なものではないというだけではなくて、現代の（少なくとも或る仕方では「洗練された」と言える）議論にも耐え得るような柔軟性・しなやかさを持っているようにも思われる（必ずしも曖昧さがそうさせているということではないであろう）。

以下ではそのアリストテレスの自然主義を当面の議論の遠い標的とする。それと同時に、この何十年かの間に力を何倍にもしてきた（もしかするともうアリストテレス以上に強力になったと言えるのかも知れない）、恐るべきオックスフォードの（あるいはオックスフォード出身の）現代の新しいアリストテレス主義者たちのことも（更に遠い標的として）私の念頭にはある。[1] もちろん私ごときがここで、恐るべきこれら両者を束にして相手にすることなど、とうていできるものではない。しかしそうであっても、私が彼らに対して（彼らに対してだと私は思っているのだが）言うことに、幾らかでも意味があるなどということはあり得ない、ということもないであろう。以下では、とにかく何が言いたいのかを（あらすじで）示すこと、何を私は彼ら（の出張）に対して問題にしたいのかを（ここでできる限りで）はっきりさせること、それが最小限の目標である。

1　自然主義・物理主義・還元主義

1　私たちの物理的・身体的条件のすべてというのは（上で言ったように、それが私たちの「自然」なのであるが）、或る意味では私たちの生命活動の可能性・能力のすべてであると言える。つまり、私たちには何ができるのか（何ができて何ができないのか）ということは、或る仕方では、私たちの物理的・身体的条件が現にこのようなものであるということによって完全に決まっていると言える。形式的・一般的には、恐らくそう言えるであろう。だが、具体的に（特定して）言うことはもちろんひどく困難である（私たちには何ができて何ができないのかを、例えば通常の意味での行為の記述のレヴェルで特定して言うことは、多分不可能であろう）。恐らく或る記述のレヴェル（動物の活動・

行動についての形式的・一般的な記述のレヴェル）ではそう言えるということではないのか。[*2] 少なくとも、「私たちの物理的・身体的条件のすべてが、私たちの生命活動の可能性・能力のすべてである」と言ったときに、「私たちの生命活動の可能性・能力」というのを一体どう記述すべきか（どのレヴェルで記述すべきか）という問題はある。しかし、記述の問題だけがあるというのではないであろう。[*3]

ところで、私たちの物理的・身体的条件というのは、ひとつの観点からは完全に最も基礎的な物質（元素）レヴェルの話であろう。だが、そのような最も基礎的な物質（元素）レヴェルの話は、もちろんそれ自体としては生命活動の話ではない。どこから生命活動の話になるのかということは別として、骨格の様態とか筋肉の組成の話、それ以上にもろもろの器官の話というのは、もちろん既に十分生命活動の話であろう。そして一般にひとが、「私たちの活動可能性・活動能力としての物理的・身体的条件」ということで思い浮かべるのは、このような器官その他のことであろう。

さて問題は、確かに私たち（私たちの何であるか）は、或る意味では私たちの物理的・身体的条件（要するに私たちの身体）そのものであると言えるのだが、それはどこまでも「或る意味では」ということでしかない、ということである。「物理的・身体的条件」としてどのレヴェルのことを考えるのであれ、私たちは要するにそういうものからできている（だから私たちはそういうものである）、と或る意味では言うことができる。しかし、私たちの何であるかという話はそれで終わるのではない。もし終わるとすれば、個体の話というのは実はほとんど意味がないということになるであろう。この点を明確にしなければならない。

その前に、次の点を確認して置く必要がある。私たちの何であるかということで私たちの物理的・身体的条件についての話ではない（それとは別の）話があるということは、私たちの何であるかということで私たちの可能性とか能力の類いが問題になるのではない、それとは別の何かが問題になる、そういう話がとにかくあるということである。そしてそういう話は当然ある。

2　私たちひとりひとりは（もちろんウマヅラハギとかイソヒヨドリの類いではないが、何でもないということはなくて、そういった類いの）或る何かである。いま仮に（私がそれである）その何かをHとする。私がHである（私はこの或るHである）というのは（多くのことを意味し得るであろうが、最も基本的な——と思われる——ひとつの意味では）私が営む生命活動のかたち・種類がHであるもののそれであるということであろう。私が営む生命活動のかたち・種類がHであるもののそれであるというのは、もちろん「Hであるものの、実現された生命活動の実際のかたち・種類」のことである。そしてそのような「かたち・種類」は当然、（基本的には）自然言語によって記述されることになる（例えば「二足歩行をする」「石器を用いる」「火を使う」といった具合にである）。

ところで、私が営む活動の形態・種類がHであるもののそれであるという場合に、私が実際に営む活動が、（たいていの）Hであるものによって営まれているような活動あるいは（たいていの）Hであるものによって実現可能であるような活動の、すべてを含む必要はもちろんない。（そのような活動の）大部分を含む必要すらないであろう。（そのひとつひとつは部分的に実現されるだけでよい）幾つかの活動を含む必要があるだけではないか。その「幾つかの活動」には実際どのような活動が含まれるのか（あるいはどのような活動が含まれるべきであるのか）という問題（またどの程度にその活動が実現される必要があるのかという問題）は単純なものではないかも知れない。しかし、単純であろうとなかろうと実質的にはそれが、或るものがHであるとはどういうことであるのかという問題（Hであることの定義の問題）であろう。

だが、そうではない、と言われるかも知れない。或るものがHであるかどうかというのはそのような活動レヴェルの話ではなくて、もっと基礎的なレヴェル、例えば遺伝子レヴェルの話である。そう言われるかも知れない。もちろん遺伝子レヴェルの話はある。だが、遺伝子レヴェルの話によって（遺伝子レヴェルの話をすることによって）例えばこの私の何であるかがやっと決まる、というようなことはない。それだけではない。遺伝子レヴェルの話としては、「Hであるものの或る何か（例えばミトコンドリア）の遺伝子組成は必ずGである

かGに極めて近い」というようなことはあり得る。しかし、その場合に仮に（ミトコンドリアの遺伝子組成が）「GであるかGに極めて近い」ということが、或るものがHであるかどうかの判定基準にはなり得たとしても、「Hであるもののミトコンドリアの遺伝子組成はGであるかGに極めて近い」ということによって「或るものがHであるとはどういうことであるのか」ということの実質が少しでも明らかになる、ということはもちろんない。

物理的・身体的組成がHに極めて近いNH（例えばネアンデルタール人）がH（ヒトあるいはホモ・サピエンスとしよう）であるかどうかというのは、最終的にはNHがどのような活動をしていたか（二足歩行をしていたかとか火を用いていたかとか石器等の道具を用いていたかといったこと）という問題である。仮にHはヒトであるが、NHはヒトではないとしてみよう。問題になるのはHとNHの違い（際立った物理的・身体的違いは脳の大きさがNHのほうが大きいということだけであるとしよう）であるが、最終的には「ヒトであるとはどういうことであるのか」がむしろ問題になる。そして「ヒトであるとはどういうことであるのか」という問題は、最終的に物理的・身体的組成の問題であるということは全然なくて、むしろ最終的には「どういう活動・行動・行為をするものをヒトと言うのか」という問題である。もしかするとNHは（私たちよりも高い知能を持つがこころは優しいというような「違い」はあるのだが）私たちと基本的には少しも変わらない活動をしていたかも知れない。だがその場合には、NHはなぜヒトではないのであろうか。

3　上の2の話は1の話とは全然別の話である。この2の話というのは、私たちが実際にどのようなかたち・どのような種類の生命活動を営んでいるのか（それをどのように言うのか・記述するのか）という話である。それに対して1の物理的・身体的条件の話というのは、そのような生命活動を私たちが営むことを可能にしている、私たちの物理的・身体的条件の話である。そして（事柄の「説明」という意味での）「話」の順序としては、活動の話の方が先であって能力の話は後である。この点でアリストテレスは完全に正しい。[4]

少なくとも次の二つの点で、活動の話の方が能力の話よりも先である。

（1）活動のために（つまり私たちによって実際に営まれるひとつひとつの活動を実現するために）私たちの物理的・身体的条件（としての能力）はあるのであって、その逆ではない。（2）上で言ったように物理的・身体的条件（能力）の話からは、（例えば）私たちがHであるということがどういうことであるのかが最終的には決まらないであろう。

アリストテレスは（1）と（2）をともに受け入れるであろう。[*5] ではそれと同時に、私たちの生命活動はすべて物理的・身体的なものである、という主張を受け入れるであろうか。この主張（主張Pとする）は強い意味にも弱い意味にもとれよう。最も強い意味にとれば、活動レヴェルの話は最終的にはすべて物理的・身体的レヴェルの話になる、という還元主義の主張になる。逆にそれに比べてはるかに弱い意味にとれば、私たちの生命活動は（どんな生命活動であっても）すべて何らかの物理的・身体的条件を必要条件として成立する、という弱い物理主義の主張となる。（1）と（2）を受け入れて、それと同時に還元主義の主張を受け入れることはできないであろう。だが（1）と（2）を受け入れて、それと同時に弱い物理主義の主張を受け入れることはできるであろう。アリストテレスは還元主義者ではないが、（上で言うような）弱い意味での物理主義者でもないと思われる。しかし、どんな意味でも物理主義者では全然ないということはない。（生命活動の或る部分は物理的・身体的条件を必要としないとする）もっと弱い意味での物理主義者であるか、あるいは（物理的・身体的条件は単なる必要条件以上の何かであるとする）もっと強い意味での物理主義者であるか、どちらかである。[*6]

どちらであっても、アリストテレスの物理主義は現代の（科学的）物理主義者のそれとは異なる。現代の物理主義者にとって（私たちの生命活動がそれであるとされる）「物理的・身体的なもの」というのは、最終的には現代の（あるいはむしろ将来の）自然科学によってその詳細が明らかにされることになる、そしてそれによって私たちの生命活動（の秘密）が何らか解き明かされることになる、そういう何かである。その何かの記述はもちろん（自然言語による）生命活動の記述ではあり得ない。それでは何も説明したことにならないからである。ここでは、説明されるもの（生命活動）の記述のレヴェルとそれを説明

するもの（物理的・身体的なもの）の記述のレヴェルとがはっきりと異なる。自然科学を前提にする現代の物理主義はそうせざるを得ないのである。[*7] しかし、アリストテレスの場合にはそういうことはない。

アリストテレスにとって（どういう意味で言われるのであれ、「私たちの生命活動がそれである」と言われる場合の）「物理的・身体的なもの」というのは、私たちの現実の生命活動（私たちが実際にしている生命活動）の可能性あるいはその能力としての私たちの自然のことである。そのような能力（例えば感覚能力とか思考能力）を記述する言語というものは、基本的には（感覚とか思考というような）私たちの日常的な活動を記述するための言語（自然言語）とレヴェルを何らか異にするようなものでは全然ない。少なくとも、レヴェルを異にするものであるとする必要が全くないであろう。もちろん、ここで言う能力の話というのは、それぞれの能力に関わる身体的諸器官及びそれら諸器官を構成する諸要素の話を含むものである。だから、最終的に能力の話のすべてが自然言語のレヴェルで終わるということはない。だがここで重要なのは、話は活動レヴェルの話からはじまって能力レヴェルの話へと連続しているということである。連続しているというのは、この場合には例えば「心理的なもの」と「物理的なもの」の間にあるような、そういう「不連続」は一切存在しないということである。だからこの場合に問題になるのは、例えば「心理的なもの」と「物理的なもの」の間には一体どのような関係があるのか、というようなことでは全然ない。むしろ、能力（の話）と活動（の話）の間にある「連続的な関係」というものを正確にどう捉えるのかというようなことが、当然問題になる。[*8]

4　アリストテレスの物理主義は（仮にアリストテレスはそう呼ぶに値する物理主義者であるとして）現代の物理主義者のそれとは異なる。ところで、主張Ｐの弱い解釈（上で言った「弱い物理主義の主張」）というのは、本当のところそれを「物理主義の主張」と呼ぶのはおかしい。「主張Ｐの弱い解釈」というのは、主張Ｐは「私たちの生命活動はどんな生命活動であってもそれが実現されるためには何らかの物理的・身体的なものが必要である」とだけ言ってい

る、とするものだからである。主張Pは本当にこれだけのことしか言わないのだとすれば、それを「物理主義の主張」と呼ぶことはできないであろう。「物理主義」と呼ぶほどのものではないと思われるからである。以下では、少なくともこれよりは（少しでも）強い主張のことを「物理主義の主張」と言うことにする。

そうするとアリストテレスは実は物理主義者ではない（そう呼ぶに値しない）ということがあり得る。しかし、（実際私はアリストテレスが物理主義者であるとは思っていないのだが）物理主義者ではないという場合でも、（冒頭で言ったように）自然主義者であるということはあり得る、と私は主張する。

ここで言う「自然主義の主張」というのは、私たちの生命活動についての話は最後は私たちの（どのレヴェルかの）自然の話になる、そしてその私たちの自然というのは私たちの物理的・身体的条件のことである、とする（ありとあらゆる種類の）主張のことであった。そうだとすると、仮に（私がそう思っているように）アリストテレスは——そう呼ぶに値する——物理主義者であるということはないとしても、その場合にそのアリストテレスが（私がここで言うような意味での）自然主義者ではあるというようなことが本当にあるのか、そもそもそういうことはあり得るのか、と言われるかも知れない。

問題は、アリストテレスの場合に「最後は自然の話になる」というのは一体何のことを言うのか、ということであろう。その話をするには少しばかり回り道をする必要がある。

2　活動・行動・行為

1　生物の物理的・身体的形状というものは、もちろんその生物の活動の形態を反映するものである。だから生物の物理的・身体的形状についての話は、（或る範囲で）その生物の活動及び活動能力についての話でもあり得る。通常私たちは（自然種についての）「何であるか」という話（カワハギであるかウマヅラハギであるかというような話）を、形状その他の物理的・身体的特徴に

ついての話であるかのように（便宜上、ということだと思う）扱っている。だが（自然種についての）「何であるか」という話は、本来はそういう話ではない。動物でも植物でも形状その他の物理的・身体的特徴は環境に適応して、場合によっては（同じ種とは思えないほどに）大きく変わり得る。それでも活動の形態が基本的に同じである場合には、同じ種とされよう。だが活動の形態までが大きく変わる場合には、もはや同じ種とはされないであろう。また、物理的・身体的形状がどれほど類似していても活動の形態が大きく異なる場合には、やはり同じ種とはされないであろう。[*9]

このように考える場合に（このように考えるのが仮に正しいとして、その場合に）「活動」ということで問題になるのは、普通は（動物の場合であれば）捕食行動とか生殖行動とか求愛行動とか子育ての仕方とか巣作りの仕方というような（一般的な）活動・行動であろう。だがアリストテレスが問題にしたのは、そのような（私たちが普通に動物の活動とか行動ということで考える類いの）ものではなかった。むしろ、（奇妙なことに、と私は言いたいのだが）感覚とか思考の類いを問題にしたのであった。もちろん、感覚とか思考の類いを私たちは普通に「活動」と言っているかも知れない（またそう言ってもよいのかも知れない）。だが、「活動」ということで捕食行動とか生殖行動の類いを考えるのと、感覚とか思考の類いを考えるのとでは、話がひどく違ってくるであろう。

感覚とか思考というのは（「活動」であると言ってもよいのかも知れないが）「行動」とか「行為」であると言うわけにはいかない（と私は考える）。以下では基本的に人間の場合を考えることにするが、動物の場合には（人間の場合とは違って）例えば見るとか聞くといった活動それ自体が「行動」になる、というような可能性があるとは考えない。[*10]

2　見るとか聞くというのは（他の多くの動物たちもしているが、私たちもしている）生命活動であるが、このような活動あるいは（普通には私たちだけがしているとされる）思うとか知るというような活動が、第一義的に私たちの生命活動であるというのではないと思われる。私たちの生命活動というのは第

一義的には私たちの行動・行為である。だが、このように言うことには一体どのような意味があるのか、と問われよう。

「彼女はいまテレビドラマを見ている」というのは（彼女の）行為を記述するものであろう。「彼はいま入試の問題を考えている」というのも（彼の）行為を記述するものであろう。だが、「私はあの男が無能だということを知っている」というのはそうではない。「海の水がひどく冷たいと私は感じている」もそうではない。では、違いはどこにあるのか。「彼（彼女）はいま何をしているのか」と訊かれて、例えば「庭いじりをしている」とか「大工仕事をしている」と同じように（何かをしていることとして）「テレビドラマを見ている」とか「入試の問題を考えている」と答えることができる。少なくとも、そういう「見ている」とか「考えている」の用法がある。それに対して、「感じている」とか「知っている」には（多分）そういう用法はない。この違いは大きいであろう。[*11]

「知っている」とか「思っている」というのは、例えばこの私の、文「あの男は無能である」によって言われること（命題）に対する或る関係（ないし態度）のことである。「感じている」もそれに似た何かである。このような（仮にそう呼ぶとして）関係とか態度というのは、状態（精神状態とか意識状態）の類いではないが、行為であるというのでもない。[*12]

「私は（あの男が無能だということを）知っている」は、私の或る状態（意識状態・精神状態）を記述しているのではない（そもそも「記述」しているのではないであろう）。確かに、例えばいつもソクラテスが問題にしているような事柄のひとつについて、もし私が本当は何も知らないのにあたかも知っているかのように思っているとすれば、その場合には私は情けない「状態」にあると言われるであろう。だがこの場合の「状態」も、例えば「酩酊状態」とか「失神状態」の「状態」と同じ意味でのそれではない。「酩酊状態」とか「失神状態」というのは（「意識状態」かどうかは別として）確かに、観察可能・記述可能な（基本的には一過性の）「（心身の或る）状態」（の記述）であろう。それに対して「知らないのに知っていると思っている」というのは、もちろんそれと同じ意味での「（心身の或る）状態」（の記述）ではない。だが（還元主

義者ではない）物理主義者は、（1）「（私が或ることを）知らないのに知っていると思っている」というのは私に生じた或る「こころの状態」であって、（2）同時にそれに対応して（そのような「こころの状態」がそれによって実現可能になっていると言える、そういう）或る「からだの状態」が何らかそのとき私には生じている、と言うかも知れない。しかし「知らないのに知っていると思っている」は、（恐らくは）どんな意味でも「状態」というようなものではないのである。[*13]

「思っている」とか「知っている」というのは、（少なくともそのひとつの意味では）例えばこの私がどういう人間であるか（愚かな人間であるか、それとも少しはましな人間であるか）が何らかそれによって決まると言えるような、そういう何かである。そういう意味でそれは、私が何かしようとするときに何をするのかを決めるようなものである、と言うことができるかも知れない。だが、それ自体は（もう一度言うが）行為ではない。（ここで詳しくは論じないが）欲望とか欲求とか意図あるいは感覚とか感情の類いは行為ではない（と私は言う）が、それと同じように（あるいはそれ以上に）「思っている」や「知っている」は（例えば私の）行為を記述するものではない（と私は考える）。[*14]

3　感覚とか思考というのは、それを状態とか行為のようなものとして（状態や行為に似た何かとして）考えることができるようなものではないと私は思うが、そのひとつひとつを私たちの基本的な（自然的な、普通の意味で言う）「能力」であると考えることにはもちろん何の異議もない。ところで、私たちの感覚能力とか思考能力というものは、果たして（それがその活動の能力であるその活動）それ自体のために（つまり感覚するということそれ自体のために、あるいは思考するということそれ自体のために）あるものなのであろうか。アリストテレスはあたかもそうであるかのように語っている。[*15]

だが、もし（例えば昆虫とか魚類・鳥類のような）運動する生物というものがこの地球上に生まれることがなかったとしたら、視覚とか聴覚のような感覚能力も、もちろん地球上に存在することはなかったであろう。運動しない生物である植物には視覚とか聴覚はもちろんだが、（私たちがそう言っている）触

覚のような感覚能力も（ひとつの言い方では、必要がないから）存在しない、と基本的には言えよう。感覚能力というのは、運動（行動）する生物が運動する（行動する）ためにそれを必要とする、だから運動（行動）の種類に応じて多様な仕方で実現される、というような能力であろう。むしろ、（見るとか聞くというような）感覚活動そのものが運動ないし行動のためにある、と言うべきかも知れない。もちろん、人間の場合には（ということだと思うが）見るとか聞くということが自己目的化する、ということがあり得る（例えば「テレビドラマを見る」とか「モダンジャズを聞く」のように）。だが、それはまた別の話である。[*16]

ところで、動物の運動（行動）の話をするためには、基本的には「感覚」（とか「欲求」）の話をするだけで足りる（つまり「思考」の話をする必要はない）かも知れないが、人間の行動（行為）の話をするためには、もちろんそれだけでは足りないと言われよう。確かに、人間の行動（行為）の話をまさに人間の行動（行為）の話としてするためにはどうしても、「思う」とか「知る」といったことが行動（行為）にとってどういう意味を持つのか（あるいは持ち得るのか）を問題にしなければならないであろう。少なくとも、「思考」（思うとか考えるということ一般）について何の話もしなくてよい、ということはないと思われる。問題は、感覚（あるいは感覚能力）の場合と類比的に、思考（思考能力）というのは行動（行為）のためにあると言えるのか、またそう言ったときにそれで一体何を言ったことになるのか、ということである。[*17]

4　「感覚（感覚能力）は運動（行動）のためにある」と言われてひどく驚くひとは多分いないであろう。しかし、「思考（思考能力）は行動（行為）のためにある」と言われた場合には、驚くひとが少しはいるかも知れない。人間が考えるということをするのは、人間にとってもちろん（ごく普通の意味で）自然なことである。しかし自然なことだから、それはそもそも何かのためにするようなものではない、ということにはならない。少なくとも（可能性として）、人間が考えるということをするのは（すべてがそうだというのではないにしてもその基本的な或る部分は、それ自体のためにそうするというのではなくて）

別の何かのためにそうするのである、ということがもちろんあり得る。そして人間がそもそも考えるということをするのは本当に別の何かのためであって、実際にそういう別の何かがあるという場合に、その別の何かというのは（最も単純な言い方では）行動・行為であるとすることは、実は少しも驚くべきことではないであろう。

だが恐らくは、その別の何かというのは単に行動・行為であるとするのではなくて、何らかの意味で「然るべき」あるいは「望ましい」行動・行為であるとすべきであろう。しかしこの問題については後で考えることにする。また、私は「思考」ということで要するに「実践的思考」のことだけを考えているのだと言われるかも知れないが、それに対してはここでは次のように言うだけにしたい。逆に「理論的思考」だけを、あるいはもっぱらそのようなものを、本来の意味での「思考」と考えるのは恐らくは間違いであろう。そのような「理論的思考」というものはそれ自体が、或る文化が長い時間をかけて作ってきた、いわばひとつの文化的構築物である。そしてその文化がそれを作ったのは、それ自体のためというのではなくて、むしろそれを使って何かするためであったろう。

（このことについては既に確かめられたというのではないから）ここでは仮に「思考は行動・行為のためにある」ということにして置く。問題になるのは、例えば私が行為に際して「どうするのがよいか考える」というような場合の「考える」等である。もちろん、（行為に際して）考える余地というものがあるから私たちは考えるのである。そもそもそういう余地がどこにも存在しなかったとしたら、私たちははじめから考えるというようなことを全くしなかったであろう。それはつまり、私たちはいつでも「衝動とか欲望の類いに従う」とか「条件反射的に刺戟に反応する」というような仕方で生きているのではないから、少なくとも（可能性としては常に、少しも強制されることなく）そのようなものに従うとか反応するという仕方で行動しないことができるから、（そのような可能性が——可能性としては十全な仕方で——私たちにある限りで）私たちにとって考えるということが意味を持つ、ということであろう。だからひとつの言い方では、何をするのかを（少なくともそうするのかしないのかを）

自分で選ぶことができるようになったそのときから、つまりそのような可能性が私たちに（いわば或るかたちをとって）生じたそのときから、私たちはものを考えるようになった、と言えるのではないか。[*18]

自然言語というものは（少なくともその基本的な或る部分は）、「思考は行動・行為のためにある」とここで私が言うときの、その「思考」を実現するための道具である（そのようなものとして私たち人間がそれを作った）。恐らくはそう言ってもよいであろう。だから本当にそう言ってもよいとすれば、結局のところ自然言語は行動・行為のためにある（そのようなものとして作られている）ということになる。多分、このように考えるのが完全に間違っているということはないと思われる。だがこのような考え方をするのと、言語を（そしてまた感覚とか思考を）いつでも世界認識というようなことをめぐって（もっぱらそういう認識との関連で）問題にするような考え方をするのとでは、何かが大きく違ってくるであろう。[*19]

5　それはそうと、私たちの回り道は余りに長くなり過ぎたのではないか。ここで私たちは、アリストテレスは自然主義者かという話に戻ることにしよう。どういう意味で私は、アリストテレスは自然主義者であると言うのか。

アリストテレスは周知のように、人間に固有の（何か特定の）活動というものがあるとする。仮にいまそういうものが何かあるとしよう。何かそういうものがあるとすること自体が問題である、ということはないであろう。問題はそれを何に使うかであろう。例えば「火の使用」とか「道具の制作」を人間に固有の活動と考えて、それを使って（つまり火を使用するかどうかあるいは道具を制作するかどうかによって）人間と類人猿とを区別するというような場合には、（「火の使用」とか「道具の制作」がこの場合に適切かどうかは別として、何かそういった特定の活動を、そういう区別をするというようなことをするために使うということ自体には）特に問題はないであろう。だが、もしいま「どういう生が人間にとってよい（あるいは望ましい・選ぶべき）生であるのか」が問題になっているとして、それが何によって決まるのかというときに、（具体的に何が言われるのであれ）人間に固有の活動というのがそういうものとし

て（それを決めるものとして）言われるという場合には、話は別であろう。[*20]

なぜ（それが何であれ、特定の）「人間に固有の活動」によってそれは決まると言えるのか。話が（人間ではなくて）植物の場合であれば、次のようになるであろう。或る特定の植物ＨＭの或る個体（群）が環境にうまく適応して成功している（繁栄している・うまくやっている・よくやっている）という場合ＨＭのその個体（群）が「成功している」というのは、ひとつの言い方では、その個体（群）がその環境に適応してその植物（種）に固有の栄養摂取活動Ｆを効果的に（うまく・よく）やっている、というようなことになるであろう。もちろんこの（ＨＭという）植物にとってはそのような生が望ましい生であると、植物学者は言うであろう。だから、ＨＭの個体（群）がそのような望ましい生を実現できるかどうかというのは、その個体（群）が環境に適応して（種に）固有の栄養摂取活動Ｆをよく（うまく・上手に）やることができるかどうか、要するに「よくＦする」ことができるかどうかにかかっている、ということになる。そしてその個体（群）がＦをよくあるいはうまく・上手にやれるかどうかというのは、もちろん（植物の場合には特に）環境に大きく左右されることではあるが、個体（群）の素質（能力・可能性）にもよることである。

アリストテレスは「人間に固有の活動」ということで特定の或る活動（仮にＫとしよう）を考えた上で、例えばこの植物ＨＭの場合と同じように（と私は考える）、それをよく（うまく・上手に）やるという、そういう特定の或る生が人間にとってよい（望ましい・選ぶべき）生である、としたのではないか。Ｋをするというのはもちろん特定の或る活動（行為）をすることである。そして、或る特定の個体（個人）がＫをよく（うまく・上手に）やれるかどうか、「よくＫする」かどうかというのは、この場合も環境に左右される部分が少なからずあると考えられるが、この場合にはしかし（先の植物の場合とは違って）その個体の素質とか能力・可能性に依存する部分の方がより大きいと言うべきであろう。とりわけ、問題になっている活動Ｋというのがそのような（生まれつきとか素質という意味での）自然的能力の――いわば自己目的化した――行使としての活動である場合には、そうである。だが問題は、能力に依存する部分が大きいかどうかではない。（能力に依存する部分が大きかろうと小さかろ

うと）いずれにしても、特定の個体にとって問題なのは、与えられた環境にあって与えられた能力を可能な限りよく・十分に発揮する（実現する・行使する）ことができるかどうかである、ということになるのではないか。[*21]

もしこのように人間の生についてそのよさとかよくということを考えるという場合には、それを或る種の（ここで言うような意味での）自然主義の主張ととることは、少しも無理なことではないであろう。しかしこのような自然主義の主張というものは、私たちがそもそも何であるのか（そして私たちがしていることは何であるのか、私たちがしていることにはどういう意味があるのか）を最終的に少しも明らかにしない、と私は言う。その理由を以下で述べることにする。

3　反自然主義

1　私たちの何であるかというのは、ひとつの意味では確かにそう言えると思うのだが、私たちの物理的・身体的条件のことであって、その物理的・身体的条件というのは要するに私たちの活動可能性・活動能力のことである。そう言ってもよいであろう。だがこの場合に、私たちひとりひとりについては何が問題になるのか。私たちひとりひとりの活動可能性・活動能力というのは、或る観点からは基本的には大差がないものと言えよう。むしろ、私たちが同じ人間であるという限りでは、そう言えなければならない。しかしもちろん、私たちひとりひとりの（持って生まれた自然的）能力というものには、大なり小なり差がある。ひとつの考え方からすれば、人間の場合であれ植物の場合であれ、すぐれた・よい個体というのは、第一には持って生まれた能力の点ですぐれていること、そして第二にはその能力を実現すること・行使することに関してすぐれていること、恐らくはこの二つを条件とすることになるであろう。（だが第一の場合と第二の場合とでは「すぐれた」「よい」の意味が異なる、と言われるかも知れない。しかしそのことは、ここでは問題にしないことにする。いずれにしても、自然主義者は上のように考えたがるのではないか。）

他方で（上の場合とは違って）、或る個体が何であるかという問題（「これは何であったか」という問題）は、ひとつには「これは何の個体か」という問題であろう。例えばこれはハルニレ（の一個体）であるとかミズナラ（の一個体）であるというような場合である。この場合にはもちろん、ハルニレとはどういうものかとかミズナラとは何のことか（というような、結局はハルニレとかミズナラの「定義」）が問題になる。だがハルニレとかミズナラというのは当然、何よりもまず（現実の・実現された）この或るハルニレとかあの或るミズナラのことである。だから、例えばハルニレとはこれこれである（という定義がある）としたら、それはもちろん現実のこのハルニレあるいはあのハルニレが（そして現実のどのハルニレも）これこれであるということである。この場合にもし、或る個体が「すぐれた・よい個体である」と言われることがあるとしたら、それは例えば「ハルニレの見本・標本としてすぐれている」とか「ミズナラの特徴をよく・見事に示している」というような意味で言われる場合であろう。

ところで、上の二つの「何であるか」という話（一方を「質料」の話、他方を「形相」の話とする）とは別に、（「質料」と「形相」の）「合成体」あるいは「結合体」という第三の話がある——アリストテレスはそう考えている——というのは本当であろうか。[*22]

2　この場合の「合成体」（「結合体」でもよい）というのは、「この繊維はAとBの合成化合物である」という場合の「合成物」のような意味で言われるのではもちろんない。「この繊維（仮にポリエステルとしよう）はAとBからできている」というのは、質料の話をしているだけである。だが、仮に「この繊維はAとB（という質料）とポリエステルの形相とからできている」と言ってみても、それが何を言っているのかは全然分からない。アリストテレスの言う「合成体」というのは、そういう意味で「できている」と言われるようなものでは全くないであろう。

アリストテレスが「合成体」と言っているのは、要するに（私がそれである）この人間とか（いま目の前にいる）このハクセキレイのことである。この人間

とかこのハクセキレイについては、例えば「このハクセキレイはきのうベランダにいたのと同じハクセキレイか」とか「さっき車の上にいたのとは別のハクセキレイか」といった、個別の事柄が問題になる。もちろん、そういう個別の事柄だけが問題になるというのではない。しかし、（このハクセキレイのような或る特定の個体の行動に関わる）そういう個別の事柄が問題になるということは確かであろう。人間の場合でももちろん同じである。[*23]

アリストテレスがどういう意味で「合成体」と言っているのであれ、アリストテレスが「合成体」と言っているものについて（例えばこの人間について）問題になる事柄は、アリストテレスが「質料」と言っているものについて（あるいは「質料」ということで）問題になる事柄とは別である。少なくとも、同じ事柄が問題になるのではない。またそれは、形相」と言っているものについて（あるいは「形相」と言っていることで）問題になる事柄とも別である。基本的にはそう言えるであろう。だからそういう意味では、先に言った（「質料」と「形相」という）二つの「何であるか」という話とは別の、（それを「合成体」とか「結合体」の話と言うかどうかは別にして）第三の話があるというのは、恐らくは本当である。問題は、その第三の話というのは一体何の話か、ということであろう。

3　第三の話というのは、個体の個体であることの（つまり個体が個体であるということの）意味についての話、あるいは個体であるということで何を考えればよいのか、個体であるとは何を言うのか、という話であろう。私はそう考える。個体であるというのは（この場合には、どのハルニレでもよいこの或るハルニレとかどのミズナラでもよいこの或るミズナラというのではなくて）、例えばこの私が岡部勉という特定のひとりの人間であるということである。だから（ひとつの言い方では）、この第三の話というのは、例えばこの私が特定のひとりの人間であるとはどういうことであるのかを、そしてそういう仕方で要するに私が何であるのかを、問題にしていると言えよう。[*24]

私が何であるのかという話は、私のからだ（私が死んだ後に残るそれのことではなくて、生きているこのからだのことであるが）の話で、すべてが終わる

のではない。何度も言うように、それは私の物理的・身体的条件あるいは活動能力・活動可能性の話でしかない。また、私が（どの人間でもよいという意味で）この或る人間であるという話がそれに加われば、それで終わりになるというのでもない。少なくとも、（もし生命活動の実現こそが目指されているのだとすれば、それを実現することが目指されている）現実の・実現された特定の生命体（特定のひとりの人間）の生命活動の――最終的には――ひとつひとつ、つまり（例えばこの私の）ひとつひとつの行為が問題になるような、そういう話が何らかどこかになければならない。そしてそこでこそ、最終的に私の何であるか（私というのは、いまこれを書いているこの岡部勉のことである）が問題になる、ということでなければならない。そうでなければ、個体の意味（個体の生命活動の意味）は本当はどこにもない、ということになるであろう。[*25]

それとも生命活動の実現こそが目指されているとするのは、誤りであろうか。私はそうは思わない。問題はむしろ、目指されているのは（もちろん、ただ生命活動であるというのではなくて）望ましい・よい生命活動である、ということにある。（目指されているのは「種の保存」であるとか単に「生命の維持・持続」であるとか「永遠の生命」であるとするような考え方もあるかも知れない。そのような考え方については、私はここでは何も言わないことにする。しかしもちろん、「目指されているのは望ましい・よい活動である」と言ったときに、それを例えば「種の保存にとって望ましい・よい活動」と解釈することはできる。だがそう解釈するのが正しいとは思わない。）[*26]

ここで「望ましい」とか「よい」を、何らか意味を限定して言うつもりは全くない。（どのような生命活動であっても生命活動でありさえすればそれでよい、という意味で）ただ生命活動の実現が目指されているというのではなくて、（それがどういう意味で言われるのであっても）とにかく何らかの意味で「望ましい・よい」活動が目指されている、と言いたいだけである。他方で、何らかの意味で「望ましい・よい」活動の実現が目指されているというのは、（それが何であれ）或る特定の決まった生命活動を何らかの意味で「よく」（例えば「うまく・上手に」の意味で「よく」、あるいは「十分に」の意味で「よく」）実現することが目指されているということではない。どういう意味で言われる

のであれ、私にとって或る特定の活動が「望ましい・よい」活動であるということが何らかはじめから（例えば私の自然という話のところで）決まっている、というようなことは一切ないであろう。だから、そういうものは既に何らか決まっていて、その上でそれを「うまく・上手に」あるいは「十分に」やれるかどうかが問題である、という話にはならない。私たちの場合には、行為について「よい」とか「よく」と言ったときにそれははじめからそういう問題である、ということは決してないのである。行為について「よい」とか「よく」と言ったときに問題になるのは、ひとつひとつの行為について個々の行為の「よさ」（どういう意味で言われるのであれ、とにかくひとつひとつの行為について何らか「よい」と言われる、その個々の行為の「よさ」）である。以下ではそれを「行為の善」と呼ぶ。[*11]

目指されているのはただ生命活動であるというのではなくて、何らかの意味で「望ましい・よい」生命活動であるというのは、目指されているのはただ行為である（例えば歩くことである）というのではなくて、行為の善であるという意味である。私たちは例えば歩くことを選ぶ（望む・欲する）という場合に、それが歩くことだから、歩くこととしてそれを選ぶ（望む・欲する）というのではもちろんない。むしろそれが（何らかの意味で）望ましい・よいことだから、（何らかの意味で）望ましい・よいこととしてそれを選ぶ（望む・欲する）のである。だから目指されているのは、それが歩くことであれ何であれ私たちのすることが何らかの意味で真実「望ましい・よい」ということである、ということになる。それが行為の善ということである。

4　私たちの場合には行為の善が問題である。しかも（形式的には常に）私たちひとりひとりにとってそれが問題であると、私たちは言うことができる。

生命活動のひとつの（しかし最も一般的な）やり方は、（それによって一定の範囲のことができるようになる）或る決まった形態を持つことによって、一定の状況あるいは環境下で一定のことだけをするというものであろう。この場合には一定の形態を持つということは、或る一定の範囲のことが（そしてそれだけが）できるということである。だが私たち人間の場合には、そういうふう

にはなっていない。私たちにとっては何をするかということ、つまり何をするのがよいかということが、少なくとも形式的には常に（どのような状況下にあっても）問題になり得る。そしてまた形式的には、私たちが何をするか、何をするのがよいかという問題、それはもちろん、私たちひとりひとりが何をするか、そして何をするのがよいかという問題であるが、私たちひとりひとりが何をするかという問題は結局は、私たちひとりひとりが何をするのがよいと思うかという問題である、と言うことができる。ホモ・サピエンスの自然史（もし自然史と言いたければ）というのは、このような生命活動のやり方というものを形式的に（つまり可能性とか能力として）実現するためのひとつの歴史であった、と言うことができるかも知れない。

私たちの自然というのは、私たちひとりひとりが（個々の場面で）何をするかという問題が、結局は私たちひとりひとりが（その場面で）何をするのがよいと思うかという問題である（そういう問題としてある）ということになるという、そういう自然なのである。もちろん、何をするのがよいかという問題は何をするのがよいと思うかという問題ではない。私が反自然主義ということを言うのは、何をするのがよいかという問題は、私たちの場合には結局は何をするのがよいと思うかという問題である（そういうことになる）、と言うためではない。反自然主義を主張することは、直ちに「何をするのがよいかという問題は、結局は何をするのがよいと思うかという問題である」と主張することに何らか結びつく、ということはない。[*28]

さて、私は先に自然主義に反対して次のように言った。——自然主義の主張というものは、私たちがそもそも何であるのか（そして私たちがしていることは何であるのか、私たちがしていることにはどういう意味があるのか）を最終的には少しも明らかにしない。——なぜそうなのか、その理由を私は上で述べたつもりである。その理由は簡単である。自然主義の主張は行為の善について最終的には何も明らかにしない。それが理由である。

註

＊1　私がこのように言うときに私の念頭にあるのは、漠然と G.E.M.Anscombe から B.A.O.Williams, D.Wiggins, J.McDowell, D.Charles といった人たちまでのことである。しかし私が言いたいのは、この人たちの言っていることがすべてアリストテレス的であるとか自然主義的である、というようなことではない。だが、少なくとも或る部分は、それぞれの仕方でアリストテレス的であったり自然主義的であったりその両方であったりする、と私は思う（自然主義ということに関して特に、D.Wiggins, *Sameness and Substance*, Oxford: Blackwell, 1980, 182-7 参照）。私はこの人たちから多くのことを学んできたが、その一方でそれぞれにそれぞれの反論すべき点があるとずっと思ってきた。問題はどういうやり方をするかである。私はここでは最も気宇壮大なやり方を模索するつもりである。

　アリストテレスの自然主義に関するより繊細な留保については、例えば J.McDowell, Eudaimonism and Realism in Aristotle's Ethics, with a reply by D.Wiggins, in R.Heinaman, ed., *Aristotle and Moral Realism*, London: UCL Press, 1995, 201-31 参照。このような繊細な留保について詳しくは稿を改めて別の機会に論じる。

＊2　例えば「直立して歩くことができる」とか「或る程度の速度で走ることができる、また泳ぐこともできる」とか「空を飛ぶことはできない」というような記述のことである。

＊3　記述の問題以外の問題については、2—1以下の議論参照。

＊4　この点については C.Witt, The Priority of Actuality in Aristotle, in T.Scaltsas, D.Charles, and M.L.Gill,eds.,*Unity,Identity,and Explanation in Aristotle's Metaphysics*, Oxford: Oxford University Press, 1994, 215-28 が簡潔で比較的わかりやすい。

＊5　しかし（1）についても（2）についても或る留保が必要であろう。詳しくは別の機会に論じる。

＊6　「もっと弱い意味での物理主義」が具体的にどういうものになるかは、（例えば『霊魂論』第2巻第1章末尾で）或る種の活動は（少なくとも特定の）物理的・身体的条件を前提にしないとされることをどう解するかによる。この点に関しては、中畑正志, 知覚と思惟——「能動理性」の生成, 『哲学年報』53, 1994, 103-46 の議論にひとつの示唆があるように思われる。

　他方、「もっと強い意味での物理主義」については、例えば D.Charles, *Aristotle's Philosophy of Action*, London: Duckworth, 1984, 213-34 参照。

＊7　現代の物理主義をめぐる議論については、D.Charles, Supervenience, Composition, and Physicalism, in D.Charles and K.Lennon, *Reduction, Explanation, and Realism*, Oxford: Oxford University Press, 1992, 265-96参照。また T.Crane, Physicalism (2): Against Physicalism, in S.Guttenplan, *A Companion to the Philosophy of Mind*, Oxford: Blackwell, 1994, 479-84 の記述が要領を得ている。

＊8　この問題について詳しくは別の機会に論じることにしたい。J.Whiting, Living Bodies, in M.C.Nussbaum and A.O.Rorty, eds., *Essays on Aristotle's De Anima*, Oxford: Oxford University Press, 1992, 75-91 の議論が簡潔で要領を得ているように思われる。

＊9　活動の形態以前のところで（例えば「カワハギはカワハギを生む」というところで）同じ種ということは既に決まっているのではないか、と言われるかも知れない。原則的にはそうだと言ってもよい。だが実際には、同じ種であるかどうかがそれによって決まるということはない。同じ種であればそういう原則に従うということである。

＊10 もちろん、見るとか聞くといった活動それ自体が「行動」になるということで何を考えるかにもよる。人間と他の動物との間にもっと連続性を見た方がよいのかも知れない。

＊11 'mental acts' は行為ではない。私たちは P.Geach, *Mental Acts*, London: Routledge, 1957 をもっとよく読むべきだろう。

＊12 ここで言う「態度」については L.R.Baker, *Explaining Attitudes: A Practical Approach to the Mind*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995 の議論が（最近目にしたものの中では）最も参考になると思われる。

＊13 'supervenience' ということを言っている人たちの多くが（1）と（2）のようなことを言っているのではないか。

＊14 「思う」と「知る」あるいは「欲望」「欲求」「意図」「感覚」「感情」に対して、行為がどのような関係にあるかについては、ここでは詳しく論じることができない。別の機会に論じる。

＊15 （触覚と味覚以外の）感覚はよく生きることのためにある。思考活動もよく生きることのためにある。アリストテレスはそう言っているではないか、と言われるかも知れない（例えば感覚について『霊魂論』第3巻第12章 434b18 以下参照）。だが、アリストテレスがそれによって何を言うことになるのかが問題である。アリストテレスがそれによって最終的に言うことになるのは、そのような活動それ自体が目的であるということである。

＊16 それは要するに「見て楽しむ」とか「聞いて楽しむ」という話であると思うが、アリストテレスはそれを活動それ自体が目的である場合（のひとつ）として語る（例えば『ニコマコス倫理学』第10巻第6章 1176b9-10 参照）。

＊17 アリストテレスが『霊魂論』で「行為という観点から心的事象を再検討するという構想」を持っていた（神崎繁，「魂の部分」をめぐって――アリストテレス『デ・アニマ』の構想――，東北大学哲学研究会『思索』 28, 1995, 35-66）としても、その場合の「行為」というのはアリストテレスが言う意味でのそれである。問題はそのことをどう考えるかであろう。

＊18 だが、人間だけがものを考えると言いたいのではない。ここでも人間と他の動物との間にもっと連続性を見た方がよいと思われる。

＊19 この場合に私の念頭にあるのは、J.McDowell, *Mind and World*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1994 のような問題設定のことである。

＊20 『ニコマコス倫理学』第1巻第7章 1097b34 あるいは 1098a14-5 前後でアリストテレスは、「人間に固有の仕事」ということで明らかに特定の活動（そしてその延長上で特定の生）のことを考えていると思われる。

＊21 『ニコマコス倫理学』第1巻第8章 1099a31 前後で「外的な善」と言われているのは、ここで言う「環境」に関連する何かであろう。

＊22 問題にしたいのは、「合成体」の話というのは何の話かということである。アリストテレスの質料形相論は生成世界の実体論であることを目指すものである（千葉恵，アリストテレスの心身論のパズルと質料形相論，『北海道大学文学部紀要』87, 1996, 1-36）とするのは正しい。そうだとすれば尚更、「合成体」について「生成消滅する

のは合成体である」とするだけでよいというわけにはいかないであろう。

＊23 アリストテレスは「合成体」であるカリアスとかソクラテスについて語ってはいるが、結局は質料と形相の話をするだけである（『形而上学』第7巻第8章 1034a5 以下参照）。

＊24 この点をめぐっては、M.Woods, The Essence of a Human Being and the Individual Soul in *Metaphysics Z* and *H*, in Scaltsas and others, eds., *Unity, Identity, and Explanation in Aristotle's Metaphysics*, 1994, 279-90 の議論が参照に値する。

＊25 「個体の意味」ということについては別の機会（自然主義と構成主義――個体 individual の意味について――，熊本大学文学会『文学部論叢』54, 1997, 1-24）にも論じた。

＊26 『霊魂論』第2巻第4章 415a22 以下でアリストテレスは、どの生物も「永遠」とか「神性」に与ることを目指すかのように語っている。しかし、なぜ「永遠」とか「神性」なのであろうか。

＊27 「行為の善」について詳しくは、拙著『行為と価値の哲学』（九州大学出版会, 1995）の第2章, 行為の真と善, 57-83 参照。

＊28 反自然主義を主張すると同時にリアリズム（実在論）を主張することは、もちろんどのような「リアリズム」を主張するかによるが、はじめから不可能であるということはないであろう。仮に自然主義を主張することがリアリズムを主張することに直ちに結びつくとしても。